

国際日本 研究センター

International Center
for Japanese Studies

NEWS LETTER ニューズレター

東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies
<http://www.tufs.ac.jp/common/icjs>

17

2015.10 No.

●夏季セミナー 2015・サマースクール院生発表会 報告 Report: the Summer Seminar and PhD Students Summer School 2015	P1
●文法・語用と教育シリーズ第四回研究会「学習者コーパスに基づく日本語誤用辞典～」報告 The 4th Workshop "Dictionary of Japanese Errors Based on a Learners' Corpus" Report	P1
●「外国語と日本語との対照言語学的研究」第15回研究会 "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 15th Research Seminar	P2
●「外国語と日本語との対照言語学的研究」第16回研究会 "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 16th Research Seminar	P2
●研究会報告「紐帯」としての日本語～「日本」を離れた日本語～ 2015年6月26日 Seminar Report "Japanese as a Bond: Japanese Outside of Japan"	P3
●比較日本文化部門・国際連携推進部門共催 イベント報告 Co-hosted events Report by the Comparative Japanese Culture Div. and International Cooperation Div.	P3
●特任研究員ワークショップ報告 2015.7.3(金) ICJS Visiting Researchers Workshop July 3, 2015	P3
●交流協会主催ウィンターキャンプ2014 台湾の大学生 国際日本研究センター訪問 2015年2月9日 Group of 20 Taiwanese Students Visits TUFs February 9, 2015	P4
●2015年 活動報告 (2015年3月～9月) Activity Report (Mar 2015-Sep 2015)	P4

夏季セミナー 2015・サマースクール院生発表会 報告 Report: the Summer Seminar and PhD Students Summer School 2015



7月14日～17日にわたって、夏季セミナー2015「言語・文化・社会—国際日本研究の試み」が開催された。またこれにあわせて、国内外の大学院生の研究発表会とスタディツアーをあわせたサマースクールも開催された。

夏季セミナーは2012年から始まり、今年が4回目である。今回はゲスト講師として、野田尚史氏(国立国語研究所)、金鐘徳氏(韓国外国語大学)、尹鎬淑氏(サイバー韓国外国語大学)、李吉鎔氏(韓国中央大学)、蕭幸君氏(台湾東海大学)、タサニー・メーターピスィット氏(タマサート大学)、範淑文氏(国立台湾大学)、徐翔生氏(国立政治大学)、徐一平氏(北京外国語大学)、スコット・ヒスロップ氏(シンガポール国立大学)の各氏。また本学からは春名展生氏、成田節氏、小林幸江氏、中野敏男氏の各教員が講義を担当した。それぞれ言語、文学、社会(教育・歴史も含む)各分野から、現在進行している研究テーマについて、刺激にあふれた講義が行われた。

国内外の大学院生の研究発表会であるサマースクールは一昨年から開始されたが、今回は38名の大学院生が参加。このうちアジアの各大学からは14名、国内からは本学学生のほかに、国際基督教大学から1名の参加があった。サマースクール

The 2015 Summer Seminar "Language, Culture, History: A Constructive Approach to International Japanese Studies" took place from July 14th-17th, in conjunction with a Summer School 2015 "Postgraduate Students' Workshop in Japanese Studies", presentations by students from home and abroad.

The summer seminar began in 2012 and is now in its 4th year. Lecturers provided stimulating, detailed presentations on ongoing research in the fields of language, literature and sociology (including education and history). This year also marked the third holding of the Summer School, with 38 graduate students presenting their research. 14 participants attended from universities outside of Japan, and 1 from International Christian University. Both the Summer Seminar and the Summer School featured lively question and answer sessions.

は研究領域に応じて3つの教室に分けて行われ、教員によるコメントや助言を含む質疑応答が熱心に交わされ、終了後、アジアから参加した大学院生には、「サマースクール修了証」が授与された。また今回の夏季セミナー・サマースクールは大学院博士前期課程の集中講義「国際日本研究入門Ⅰ・Ⅱ」としても開講された。

4日間のべ参加者数は1000名を超えた。

さらにサマースクールにあわせて、7月12日、13日に、海外から参加した院生を対象としたスタディツアーも開催され、江戸東京博物館と府中の大國魂神社を見学し史跡に触れる機会となった。

サマースクール終了後の7月16日には、円形食堂において、院生懇親会が、宮崎副学長、海外の院生のホームステイに協力いただいた関係者の方々の参加も得て、盛大に開催された。

さらに7月17日は午後からジャーナル国際編集顧問会議が開催され、ジャーナル発行に関する議事のほかに、夏季セミナーについての意見交換も行われた。

夏季セミナーの各講義はセンターのHPで見ることができる。また、大学院生の研究発表の要旨は国際日本研究センターのジャーナル第6号(2016年3月までに発行)に掲載されオンラインでも公開される。

(友常勉)



文法・語用と教育シリーズ第四回研究会「学習者コーパスに基づく日本語誤用辞典～」報告 The 4th Workshop "Dictionary of Japanese Errors Based on a Learners' Corpus - Report

2015年3月20日(金) 15:00~17:00 研究講義棟104室



はじめに、本コーパスの開発担当者である小柳昇氏(本センター特任研究員)から日本語誤用辞典の活用方法について説明があった。正誤判定がわかる機能がほしいという海外の日本語教師からの要求によりこのコーパスやオンライン誤用辞典が生まれたという。語彙、文法、語用のレベルにおける日本語学習者の誤用分析のデータとして有効である

First, professor Noboru OYANAGI (ICJS Special Researcher) presented about the possibility of the use of the method of the Japanese native English learner corpus that are developing in the international Japanese education section to error analysis. Then, professor Keiko MOCHIZUKI, TUFs, presented about Japanese learners of English prepositions "in", "on", "at". According to the analysis of this corpus, the Japanese learners of English, it is remarkable excessive use of "in". She pointed out that spatial perception is related to error cause. Finally, professor Hiroshi SANNO, TUFs, making the system development of this corpus is, make a comment with respect to universality and individuality of the preposition that commonly found in Japanese and English and Chinese, Study Group has been concluded.

だけでなく、誰もが日本語の正誤がチェックできるという実用性を詳しく解説し、さらに今後のコーパス研究の可能性についても提示された発表であった。次に本プロジェクトを企画する望月圭子氏(本学教員)が、日本人の英語学習者に「in」の過剰使用が多い要因として、日本語の「～内」「～中」を「内部空間に融合しているモノ」とする空間認知が関与している可能性があると示された。最後に、本コーパスのシステム開発担当者の佐野洋氏(本学教員)から、日本語、英語や中国語に共通して見られる前置詞の普遍性と個別性に関するコメントがあり、研究会が締めくくられた。(谷口龍子)

『外国語と日本語との対照言語学的研究』第15回研究会 "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 15th Research Seminar

日時：2015年3月7日(土) 14:00 ~ 17:40
場所：東京外国語大学 語学研究所 (研究講義棟4階419号室)
発表者・講演者と題目

- ・森田耕司氏(東京外国語大学) 研究発表「ポーランド語と日本語の『言語的世界像』に関する対照研究」
- ・早津恵美子氏(東京外国語大学) 研究発表「使役文と使役動詞」
- ・有田節子氏(大阪樟蔭女子大学) 講演「日本語条件表現の諸相」



森田氏の発表は、ポーランド語と日本語との対照研究について、ポーランドにおける近年の動向を伝える内容であった。ポーランドでは、「民族言語学」(ethnolinguistics)の流れを汲み、ポーランド語と日本語それぞれを通じてその「言語的世界像」を明らかにし、両者の共通点・相違点を見出し、いこうとする研究が行われ始めているという。「言語的世界像」とは、その言語社会において受け継がれている世界観・価値観に基づき、形成された世界のとらえ方というべきものがある。ケーススタディとして日本語とポーランド語における「仕事」「自由」をキーワードに、氏が両言語における世界像を探った研究について報告が行われた。聴衆との質疑応答では、「仕事」「自由」をめぐる肯定的・否定的含意の有無、また研究の方法論として、歴史的な背景を確認しつつ、各種テキストからデータを抽出して、客観的に言語的世界像を再構築することの難しさについても意見が交わされた。発表の冒頭では、森田氏および氏の指導する本学ポーランド語専攻の学生たちが、来日したポーランド大統領と会見し、懇談を行ったとのニュースもあわせて紹介された。



続いて、対照日本語部門長の早津氏により、氏がここ何年かの間考察を深めてきた「使役」をめぐる研究発表が行われた。今回の研究発表における氏の主張点は主として2つあり、まず、動詞に「-(サ)セル」という接辞が付加された「使役動詞」を語彙体系において、一方、使役動詞を述語とする文は「使役文」として文レベルでそれぞれの性質を考えるということ、そして、使役文と原動文(もとの文)の対応関係を再考することにより、日本語のヴォイス体系を俯瞰的にとらえ直すという点である。「太郎が花子に

荷物を運ばせる」という使役文には、対応する原動文として「花子が荷物を運ぶ」があることは一般に知られているが、「太郎が自分で荷物を運ぶ」を対応させる考え方もある。氏は、後者の考え方は、両文の違いを、主語(太郎)が、原動詞(運ぶ)の表す動作の間接的な主体か直接の主体かという違いとしてとらえるものであると再評価する。この考え方をとると、使役文と原動文、そして受身文を、主語をめぐる文構造のあり方の体系、すなわち日本語におけるヴォイス体系として包括的にとらえることができるという氏の考えは非常に興味深い。聴衆からも、「～てやる／くれる／もらう」など恩恵の授受を表す補助動詞も含めた体系化の可能性について、また使役動詞の中に「聞かせる」「知らせる」など既成性の強い動詞も見られるとする氏の指摘について、その詳細を問う質問などが寄せられ、熱心なやりとりが行われた。



有田氏の講演では、日本語の条件文研究の諸問題、および日本語文法における「認知的条件文」の位置づけについて、密度の濃い内容が展開された。まず、条件文の定義と、日本語の条件文およびその周辺構文との関連が確認された後、現代日本語における基本的な条件形式とその分布の様相が概観され、条件形式による非条件的用法や、条件形式の談話標識化など、条件表現をめぐる興味深い諸問題が広い射程の中で示された。本論においては、条件文をとらえる2つの主要な鍵となる概念として、話し手の知識と前件との関係、そして前件の既定性(発話時において、事態の成立・非成立が決定しているか否か)の2つが示され、随時英語の条件文との対比をふまえながら、詳細な議論が展開された。氏は、前件の既定性に着目することで、日本語の条件文を5つに分類しており、今回特に話題として取り上げられたのは、「もし、(昨日の試合で)日本が勝った(ん)なら、決勝リーグに進む可能性が残されているんだが」のような「認知的条件文」(発話時点で前件の真偽は定まっているが、話し手がその真偽を知らないというタイプ)である。聴衆との間では、有田氏が専らこの認知的条件節に分布するとする「～のなら」節について、「の」が果たす役割に注目した質疑応答などが行われた。日本語の条件文をめぐる広範な内容については、さらに詳細な議論を行うには時間は限られていた。

学内・学外から集まった約30名の参加者は、聴き応えのある内容の濃い発表・講演に、いずれも熱心に耳を傾けていた。(鈴木智美)

Lecturers: Setsuko ARITA (Osaka Shoin Women's University) "Aspects of Japanese Conditional Expressions", Koji MORITA (TUFS) "Comparative Research into the 'linguistic world views' of Polish and Japanese", Emiko HAYATSU (TUFS) "Causative Sentences and Causative Verbs"

Professor MORITA reported on recent research in Poland on the contrasting "linguistic world views" of Polish and Japanese, focusing on the words "work" and "freedom". Professor HAYATSU reexamined the relationship between causative sentences and their original sentences and offered the interesting viewpoint that causative, original and passive sentences could be viewed comprehensively through the system of structures concerning the sentence subject – in other words, through the voice framework of Japanese. Professor ARITA identified the speaker's knowledge and relation to the first clause as well as the settledness of the first clause as two key concepts to understanding conditional sentences. She presented detailed discussion on Japanese epistemic conditional sentences, through comparisons with English.

(Tomomi SUZUKI)

『外国語と日本語との対照言語学的研究』第16回研究会 "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 16th Research Seminar

日時：2015年7月11日(土) 14:00 ~ 17:40
場所：東京外国語大学 留学生日本語教育センター さくらホール
発表者・講演者と題目

- ・箕浦信勝氏(東京外国語大学) 研究発表「マダガスカル手話等の一致動詞について」
- ・秋廣尚恵氏(東京外国語大学) 研究発表「フランス語における非従属節化の問題をめぐって」
- ・影山太郎氏(国立国語研究所) 講演「言語類型と2種類の複合動詞」



秋廣氏は、フランス語の従属節で因果関係を表す4つの接続詞 – car, comme, parce que, puisque について発表された。談話文法レベルで、「発話行為」(speech acts)を遂行する機能を果たすこと、主節から独立性の高い非従属的な様々な接続詞の用法が観察されるということを実例を基に解説した。



箕浦氏は、手話の文法、特に一致動詞について日本手話とマダガスカル手話を対照させた。日本手話では、順向動詞はP・R項とだけ一致し、反転動詞はA項とだけ一致する。マダガスカル手話は順向動詞的でありながらA項とも一致するものも見られることが実際の手話をビデオで紹介しながら説明された。



影山氏は、日本語のV+V型複合動詞とN+V型複合動詞について、形態的な言語類型の観点から分析した。日本語において前者の複合動詞の生産性が極めて高く、後者が少ない理由は、述語領域と名詞領域における形態的な膠着性(agglutinative)の非対称性が影響しているということである。

(早津恵美子・谷口龍子)

Lecturers: Taro KAGEYAMA (National Institute for Japanese Language and Linguistics) "Language Typology and 2 Types of compound verbs" Speakers: Nobukatsu MINOURA (TUFS) "Verb Agreement in Madagascan Sign Language", Hisae AKIHIRO (TUFS) "Subordinate Clauses in French"

Hisae AKIHIRO presented on 4 French conjunctions used in subordinate clauses to express causal relationships, car, comme, parce que and puisque. She observed their function in effecting speech acts at the level of discourse grammar and the usage of various non-subordinate conjunctions with a high degree of independence from main clauses. Nobukatsu MINOURA used video footage to contrast verb agreement in Japanese and Madagascan sign language. In Japanese sign language, proactive verbs agree only with P and R clauses, while verbs of inversion agree only with A clauses. In Madagascan sign language some proactive verbs also agree with A clauses. Taro KAGEYAMA analyzed Japanese Verb+Verb type and Noun+Verb type compound verbs from the perspective of morphological typology. In Japanese, the former are highly productive while the latter show little productivity, an effect of the asymmetry in the degree of morphological agglutination in predicate scope and noun scope.

(Emiko HAYATSU/Ryuko TANIGUCHI)

研究会報告「『紐帯』としての日本語～「日本」を離れた日本語」 2015年6月26日 Seminar Report “Japanese as a Bond: Japanese Outside of Japan”



JSPS科研費(B)23310176 「<紐帯としての日本語>」の研究成果を基に社会言語学部門主催で公開研究会を開催した。

この講演会は科研の成果報告を兼ねたシリーズの4回目となるもので、二つの講演が行われた。本学非常勤講師の高嶋朋子氏引揚者の経験から見ることばの紐帯について—奄美出身台湾引揚者を対象に—、内地以上に「日本語(『国語』)の推進が焦点化した外地に居住経験を持つ人々、具体的には奄美出身台湾引揚者のことばをめぐる経験を調査したものである。1930年代頃から1953年の日本復帰前後までの奄美においては、標準語による紐帯が強いられつつも、当時の地域社会を形成する人々を紐帯したシマグチということばの存在が大きかったこと、日本統治下の台湾における「標準語に近い言葉」による紐帯を経験した奄美出身台湾引揚者年層にとっては引き揚げ後にそのシマグチによる紐帯とどのように向き合うかが、戦後社会へ

The seminar, hosted by the social linguistics division, consisted of two lectures on research results from the MEXT/JSPS KAKHENHI (B) (23310176) “Japanese as a bond” project.

Tomoko TAKASHIMA (TUFS) presented “The bonds of language seen through the experiences of repatriates – Amami repatriates from Taiwan”, describing the results of surveys of Amami natives who emigrated to Taiwan and who were repatriated after WWII. Such peripheral areas were the focus of greater promotion of the Japanese language than were central areas. Satoru KUBOTA (Nara Prefectural University) presented “Language use by people of Japanese descent in the Dominican Republic”. Having established the state of language use and acquisition, he examined the position of language for second and third generation migrants from the perspective of homeland ties. Emigrants still show dedication to Japanese and attempt to maintain links with Japan by maintaining the Japanese language. (Megumi SAKAMOTO)

の参与に直接的につながっていったのではないということなどが報告された。奈良県立大学専任講師の窪田暁氏によるドミニカ共和国における日系人の言語使用の実態について、ドミニカ共和国の日系人の言語使用や言語習得の実態を把握し、国内の2世・3世を含めた、移民にとっての言語の存在を故郷との紐帯という視点から考察したもので、ドミニカの日系人移民の言語使用、言語維持の実態について、言語能力、意識、継承の側面から明らかにしたものである。その結果ドミニカ日系移民には日本語への強いこだわりがあり、特に1世にとっては日本語を故郷に重ね合わせ、日本語を維持することで日本とのつながりを維持しようとする傾向があることなどが報告された。

遅い時間の開催であったが、熱心な聴衆との意見交換が活発に行われた。なお、今回まで計4回開催した同研究会の記録をブックレット5号として来月、刊行する予定である。(坂本恵)



比較日本文化部門・国際連携推進部門共催 イベント報告

Co-hosted events Report by the Comparative Japanese Culture Div. and International Cooperation Div.



1月29日、ミニシンポジウム「アジア映画における身体、イメージ(壁)——『座頭物語』、『中華女兒』、『緋牡丹博徒 お竜参上』

菅孝行氏(劇作家、評論家、梅光学院大学)、橋本雄一氏(本学)、友常勉氏(本学)

3つの映画について、コメンテーターは映画史的な背景を確認しながら、異形の身体とイメージ、ジェンダー、そして(アジア)に遍在する(壁)について問題提起した。さらに、任侠映画のヒロインが体現していた男たちの(欲望)と、それとは非対称的に、(日本)の戦後を告発する中国映画の位相、さらに映画づくりとは何かという問いまで、フロアも含めて刺激的な討論が交わされた。参加者は10数名であったが、次の企画への熱い期待も寄せられた。(友常勉)

6月19日、本学大学院総合国際学研究院の沼野恭子氏を講師に、比較日本文化部門・国際連携推進部門共催の研究会を開催した。講演は「物語はどのように作られるか—ボリス・ピリニャークと日本」というタイトルで行われた。

ボリス・ピリニャーク(1894-1938)は、1920年代前半はソヴィエト文学界を牽引する作家であったが、その後、執筆した作品によって「反ソ的」として弾劾され処刑

January 29th: a mini symposium entitled “Bodies, Images and ‘Walls’ in Asian Cinema: The Tale of Zatoichi, China Girl, Red Peony Gambler: Red Peony Finds a Daughter”, with playwright/critic Takayuki KAN (Baiko Gakuin University), Yuichi HASHIMOTO and Tsutomu TOMOTSUNE (both TUFS). Participants and audience members had stimulating discussions on the embodiment of male “desire” in the heroines of ninkyō films, the asymmetric position of Chinese cinema critical of postwar Japan, and even the question of the essence of filmmaking. (Tsutomu TOMOTSUNE)

June 19th: “How stories are made – Boris Pilnyak and Japan” was lectured by Prof. Kyoko NUMANO (TUFS). Boris Pilnyak (1894-1938) was a leading author in the Soviet sphere during the early 1920s but was later executed after being denounced as “anti-Soviet”. Professor NUMANO placed Pilnyak in Russian literary history and also analyzed Pilnyak’s short works on his two visits to Japan. These include criticism of Japan’s I-novels, rejection of the literary world and a sense of distance towards the Orient. The lecture, attended by outside researchers and Russian study abroad students, proved to be fascinating and convincing and was followed by a lively question and answer session. (Kyoko NOMOTO)



された人物である。沼野氏はピリニャークの過去に書かれたものを組み合わせるコラージュ等、斬新なポストモダンの手法について言及し、また革命後の生命力のあらわれとしての本能や性への関心という潮流を体現する作家として、ロシア文学史に位置づける。このボリス・ピリニャークは現代日本において必ずしも知名度が高いとはいえないが、1920年代には日本語訳の作品も多数あり、1926年と1932年の二度に渡って来日しているという。沼野氏は日本来訪に関わるピリニャークの短編「物語がどのように作られているか」という物語(1926年)と『日本印象記』(1929年)を取りあげ、彼の日本の私小説へのあり方や文壇への拒否感、「東洋(東)への距離感を説得的、魅力的に読み解いていく。また来日中の秋田雨雀、小山内薫、田山花袋、谷崎純一郎、米川正夫らとの交流や、近年の海外の研究者によるピリニャークへの着目の紹介なども大変興味深かった。1920年代は日本社会も「現代社会への転形期」といわれる時代であり、同時代性といったものを考えさせられた刺激的かつ示唆に富む講演であった。当日は学外からの研究者やロシアからの留学生も参加し、講演後は熱心な質疑応答が交わされた。(野本京子)

特任研究員ワークショップ報告 2015.7.3 (金) ICJS Visiting Researchers Workshop July 3, 2015

公益財団法人博報堂児童教育振興会日本語海外研究者招聘事業研究者兼本センター特任研究者3名による研究発表が行われた。



ナデジダ・ウェインベルグ氏(イルクーツク国立言語学大学院准教授)の発表テーマは、「ビジネス日本語における敬語とロシア語の敬意表現対照分析: 成功したビジネスコミュニケーションの確率と維持するための実践的な推奨」である。氏は、日本在住で日本とロシアに関係のある企業に勤める日本人とロシア人に対して、ビジネスの場面における御世辞やほめ言葉の使用についてインタビューを行った。その結果、外見についてのほめ言葉があまり好まれない点や依頼の前に相手をほめる点などで両者に共通点が見られるものの、日本人のほうがロシア人より意識的に相手をほめる傾向があり、批判や注意をする際にほめ言葉を付け加えることがわかった。



スタニスワフ・マイヤー氏(ヤギェロン大学言語学部東洋学校助教)の発表テーマは、「漢字ジゴク: ポーランド人の日本語学

生向けの多機能のEラーニング・プラットフォーム」、ポーランド人の漢字学習者向けにEラーニングを開発中であり、ヤギェロン大学ではすでに学内向けに2,484の見出し語と5,450の例文が公開されつつあるという。漢字の読み、書き順や部首だけでなく写真や解字まで紹介され、誰もが深く楽しめるものとなっている。見出しから例文までほぼ一人で作り上げたという事実に驚嘆する。



豊田悦子氏(メルボルン大学アジア研究所上級講師)の発表テーマは「異文化学習の一環としての日本語Eラーニング」である。豊田氏は、オーストラリアでアジアの漢字圏の日本語学習者が増える中で、日本語学習に自信を失いかけている非漢字圏の学習者のために、容易に日本語の文章を解説するシステムを開発したいという強い動機から研究を始めたという。単なる言語学習だけに終わらず、日本とオーストラリアの学生間でビデオレターを交換することで互いの習慣や考えの相違に気づき、相互理解が始まることを主張されていた。3名の研究はいずれも日頃の日本語教育の現場から生まれた強い動機に支えられた説得力のあるものであった。当日は40名近い聴衆が集まり盛況であった。(谷口龍子)

Speakers: Nadezda VEINBERG Mikhailovna (Irkutsk State Linguistic University, Russia) MEYER Stanislaw Jan (Jagiellonian University, Poland) TOYODA Etsuko (The University of Melbourne, Australia)

The 3 guests researchers in the Hakuho Foundation's 9th International Joint Research Project, gave the presentations. Professor VEINBERG analyzed for the interview data that either have any way of thinking about how to use the Japanese and Russian businessmen of words and your flattering compliments in the workplace who lives in Japan. Professor MEYER introduced "Kanji-Jigoku: a multifunctional e-learning tool for Polish students of Japanese language. Professor TOYODA introduced the practice of E-learning as part of the cross-cultural between Japan and Australia. These three studies were both in some of the convincing, which is supported by the strong motivation was inspired in the work of daily Japanese education. (Ryuko TANIGUCHI)

交流協会主催 ウィンターキャンプ2014 台湾の大学生 国際日本研究センター訪問 2015年2月9日 Group of 20 Taiwanese Students Visits TUFU February 9, 2015



公益財団法人交流協会主催ウィンターキャンプの一環として、台湾各地から参加した20人の大学生が東京外国語大学を訪れた。日本語のみならず、経営学や経済学、法律、社会学などを学ぶ学生たちは、国際日本研究セン

ター長によるセンターの目標や具体的活動についてのプレゼンテーションを熱心に受講した。その後、本学の学生10人(留学生も含む)も加わり、5グループに分かれて、日本と台湾の社会や文化の共通点や差異についてディスカッションし、その結果を報告した。ジェンダーや相互の社会への関心度の違いなど興味深い報告が多く、学生同士の交流という点でも大変意義深い集いとなった。(野本京子)

20 university students from across Taiwan visited Tokyo University of Foreign Studies as part of a winter camp organized by Interchange Association, Japan. After ICJS presentation about its aims and activities, students then split into 5 groups and were joined by 10 TUFU students to discuss the similarities and differences between Taiwanese and Japanese society and culture and presented the results of their discussions. The event thus proved highly meaningful in terms of student exchange. (Kyoko NOMOTO)

2015年 活動報告 (2015年3月～9月)

Activity Report (Mar 2015-Sep 2015)

■講演会・ワークショップ等■

- 3月7日(土) 対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第15回研究会
有賀節子氏(大阪樟蔭女子大学)、早津恵美子氏、森田耕司氏(東京外国語大学)
- 3月20日(金) 国際日本語教育部門主催 文法・語用と教育シリーズ第4回研究会「学習者コーパスに基づく日本語誤用辞典～日本人による英語・中国語学習者コーパス誤用類型との対比～」 小柳昇氏(拓殖大学工学部・十文字学園短大)、佐野洋氏、望月圭子氏(東京外国語大学)
- 6月19日(金) 比較日本文化部門・国際連携推進部門共催 研究会「ロシア文学と日本」 沼野恭子氏(東京外国語大学)
- 6月26日(金) 社会言語部門主催公開研究会「紐帯としての日本語～『日本』を離れた日本語」 窪田暁氏(奈良県立大学)、高嶋朋子氏(東京外国語大学)
- 7月3日(金) ※特任研究員ワークショップ ※博報財団招聘者:スタニスワフ・マイヤー氏(ヤギェロン大学)、ナデジダ・ウェインブルグ氏(イルクーツク大学)、豊田悦子氏(メルボルン大学)ノコメント:佐野洋氏、坂本恵氏、林俊成氏(東京外国語大学)
- 7月11日(土) 対照日本語部門・国際日本語教育部門共催 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第16回研究会
影山太郎氏(国立国語研究所)、秋廣尚恵氏、箕浦信勝氏(東京外国語大学)
- 7月14～17日(火～金) 国際日本研究センター主催 夏季セミナー・サマースクール2015 「言語・文化・社会—国際日本研究の試み」
徐一平氏(北京外国語大学)、范淑文氏(国立台湾大学)、徐翔生氏(国立政治大学)、蕭幸君氏(東海大学)金鍾徳氏(韓国外語大学校)、尹鎬錫氏(サイバー韓国外語大学校)、李吉鎔氏(中央大学校)、スコット・ヒスロップ氏(シガボール国立大学)、タサニー・メータービスイット氏(タマサート大学)、野田尚史氏(国立国語研究所)、春名展生氏、中野敏男氏、成田節氏、小林幸江氏(東京外国語大学)
- 2015年8月1-2日(土、日) 国際日本語教育部門共催 国際ワークショップ「卓越した外国語教育科学」 陸潔氏(上海外国語大学)、呉佳厚氏(国立台湾師範大学)、望月圭子氏、アハムド・カリム氏、ローレンス・ニューベリーペイトン氏、游韋倫氏(東京外国語大学)

■会議歴■

- センター会議: 2015年 3月5日、4月9日、5月14日、6月11日、7月9日

■ Lectures and Workshops ■

- 7 Mar.: "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 15th Research Seminar by Setsuko ARIGA (Osaka Shoin Women's University), Emiko HAYATSU, Koji MORITA(TUFS)
- 20 Mar.: The 4th Research seminar " by Noboru OYANAGI (Takushoku University/Jumonji Junior College), Hiroshi SANO, Keiko MOCHIZUKI (TUFS)
- 19 Jun.: Research Seminar "How the Narrative Is Invented: Boris Pilnyak and Japan" by Kyoko NUMANO (TUFS)
- 26 Jun.: Open Seminar "Japanese-Language as a bond: Japanese Language used outside of Japan" by Satoru KUBOTA (Nara Prefectural University), Tomoko TAKASHIMA (TUFS)
- 3 Jul.: ICJS Joint Researchers Workshop Lecture by Nadezda VEINBERG Mikhailovna (Irkutsk State Linguistic University, Russia), MEYER Stanislaw Jan (Jagiellonian University, Poland), Etsuko TOYODA (Lecturer B, Asia Institute, The University of Melbourne, Australia)
- 11 Jul.: "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 16th Research Seminar by Taro KAGEYAMA (National Institute for Japanese Language and Linguistics), Nobukatsu MINOURA, Hisae AKIHIRO (TUFS)
- 14-17 Jul.: ICJS Summer Seminar 2015 "Language, Culture, History: Constructive Approach to International Japanese Studies" by XU Yi Ping (Beijing Foreign Studies University), FAN Shu Wen (Taiwan University), HSU Hsiang Shen (National Chengchi University), HSIAO Hsing Chun (Tungshai University), KIM Jong Duck, (Hankuk University of Foreign Studies), YOUNG Ho Sook (Cyber Hankuk University of Foreign Studies), I H Ki Lyong (Chung-Ang University), Scot HISLOP (National University of Singapore), Tasanee METHAPISIT (Thammasat University), Hisashi NODA (National Institute for Japanese Language and Linguistics), Nobuo HARUNA, Toshio NAKANO, Takashi NARITA, Yuki KOBAYASHI, (TUFS)
- 1-2 Aug.: International Workshop on Advanced Learning Sciences by Lu Jie (Shanghai International Studies University), Chia-Hou Wu (National Taiwan Normal University), Keiko MOCHIZUKI, Ahmed Karim Ezz, Laurence Newbery-Payton, Wei-Lun YU (TUFS)

■ Meetings ■

- Center meetings: 2015-5 Mar., 9 Apr., 14 May, 11 Jun., 9 Jul.

■今後の活動予定■

- 12月5日(土)対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第17回研究会
西村義樹氏(東京大学)、発表者:大谷直輝氏、菅原陸氏(東京外国語大学)
- 12月8日(火)国際日本研究センター比較日本文化部門・国際連携推進部門共催
ワークショップ「個と国家と産業: 15年戦争下の演劇と映画の言説について」(仮)
イリス・ハウkamp氏(SOAS; CAAS招聘講師)、菅孝行氏(評論家、劇作家、梅光学院大学特任教授)
- 2016年1・2月比較日本文化部門・国際連携推進部門共催 研究会「オーストラリア先住民とアイヌ民族」(仮)
山内由里子氏(東京外国語大学)、マーク・ウィンチェスター氏(東京外国語大学非常勤講師)、岡和田晃氏(文芸評論家)
- 3月12日(土) 対照日本語部門主催 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第18回研究会

■ Future Events ■

- Sat. 5 Dec. "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 17th Research Seminar by Yoshiaki NISHIMURA (Tokyo University), Naoki OHTANI, Mutsumi SUGAWARA (TUFS)
- Tue. 8 Dec. Workshop "The Individual, the State, and the Industry: Discourses in Theatre and Film in the Fifteen Years War" (tentative) by Iris HAUkamp (SOAS; CAAS Visiting Researcher), Takayuki KAN (Critics, Baiko Gakuin University)
- Jan. Lecture "Native Tribes of Australia and Ainu" (tentative) by Yuriko YAMANOuchi, Mark WINCHESTER (TUFS), Akira OKAWADA (Literary Critics)
- Sat. 12 Mar. "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 18th Research Seminar